

大学・学生との交流から中国社会を読む

——東大北京代表所からの報告

東京大学北京代表所所長 宮内雄史



私と中国との縁は1966年に東京大学に入学して第2外国語に中国語を選択したのが最初の機会です。その後、三菱商事に入社し、それ以来、主に中国関係業務に携わってきました。2007年より現在の東京大学北京代表所におります、と自己紹介すると、東大が北京に事務所？大学の事務所とは何をしているの？というのが皆さんの反応です。先ず、その点を簡単にご説明します。

東大の北京事務所

北京市の地図を広げると、面積は関東地方の約半分弱、やや南寄りにある市中心部は、大体東京23区に三鷹あたりまでを加えたぐらいで、西北部の頤和園

や円明園のある付近に北京大学、清華大学をはじめ多数の大学が集中しており、われわれの事務所はその一角にあります。

中国では1952年にソ連の大学体制に倣って、社会のニーズに直結する単科大学制へ向け、全国の大学を全面的に再編成しました。総合大学であった清華大学は、工学系の一部だけを残して工学系大学になり、理系、即ち物理・化学・生物・数学等は文系とともに北京大学の方へ統合され、北京大は文理系大学となりました。市内の故宮の裏門近くにあった北京大学は、それまでキリスト教会系の燕京大学があった現在のキャンパスに移転して来たものです。

その他に、独立した北京鋼鉄学院、地質学院、航空学院、石油学院など多数の

大学が設立されました。現在は学校の名前もそれぞれ変更されたりしていますが、事務所のある帯にはこうした大学と科学院の研究所が多数集中しています。尚、1980年以降は、中国の各大学とも再度総合化を図っています。

そうした環境で、われわれは中国のトップ大学との交流促進、優秀な中国人留学生確保の為の支援、同窓会活動への協力、今後は東大生の中国留学促進というような業務を行っています。東大の全学2万8500人中に外国人留学生は3100人、うち中国人学生が35%の1100人程います。留学生の90%以上が大学院生、そして修士よりも博士がやや多いです。学部入試と異なり、優秀な留学生を確保するために丁寧な対応が必要となっています。

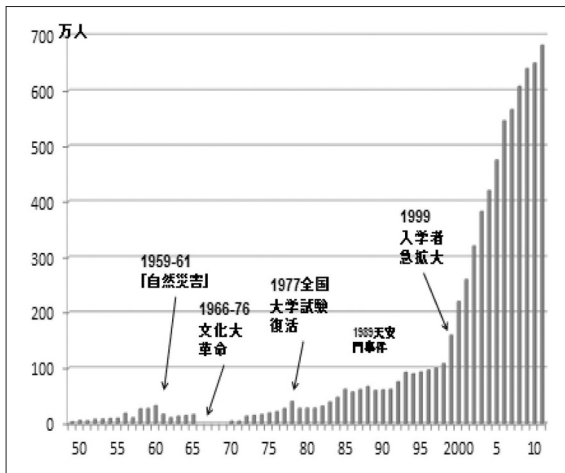


図1 中国の各年大学入学者数

ます。

中国の大学の発展状況

図1に示すように、中国での大学生の毎年の入学者数は、1999年から急増し、21世紀に入ったこの10年余りは飛躍的に増大しました。戦後から20世紀末までの50年間で、それ以後とは中国が全く異なる世界へと転換、飛躍していることを示唆するようなグラフとなっています。今や、中国の大学生の数は2500万人で日本の9倍程になりました。日本で

は、中国の国家予算が発表される度に、軍事予算が2桁の伸びである事が強調されますが、実際には教育費や科学技術予算は軍事費以上に伸びており、10年前と比べて国家予算に占める比率は軍事予算が7・6%から5・7%に減少、教育費は16・1%から16・3%に、科学技術費は3・6%から4・5%へと増加しています。又、予算そのものも税収が12年間で8倍に増加しており、日本のように税収が横ばいで30〜40%を赤字国債の累積で対処している事情とは異なる潤沢な資金に支えられて、大学も発展してきていると言えます。

厳しい受験競争

中国の大学試験には、受験者が最近若干減りましたが900万人以上が応募されました。実施日は同じですが、試験問題は地方の省毎に異なります。点数や順位も省毎に出ます。大学の方は募集人員を各大学の学部・学科毎に省別に割り当てます。学生の点数が出た所で、上位大学群から順番に4段階に分けて、志望学生とのマッチングを行っていきます。下の方まで全て決まるのに、大体1カ月

程かかります。

ペーパー試験の点数だけではなく、少数民族・数学オリンピック・社会活動等の実績による加点制度があります。末端へいくと、これが行き過ぎて半分以上の学生が何らかの加点を持つようなケースが出たり、それは行き過ぎと加点制度を全てやめる省が出たりと、入試制度の改革は色々細かい試行錯誤を続けています。

又、清華大学のケースを例にしますと、通常試験の結果による入学者が3分の2で、他に美術学院の特別入試、推薦入試、芸術特待生、スポーツ特待生、軍・警察からの将来の就職とリンクした奨学金による入学者など、入学ルートもそれなりに多様です。

地方各省の理科系・文科系受験者の成績一番の学生入学先を、この10年間分集計したものがありますが、北京大学と清華大学がダントツです。最近では香港の大学が北京市や上海市のトップ学生を確保してニュースになったりしています。何れにせよ2300もある大学の格差は大きく、受験は激しい競争となっています。

大学生の就職難

他方、下位大学を卒業しても就職が厳

しく、むしろ職業学校の方が有利という面もあって、大学受験者そのものは漸減しています。

学生数が増えたこともあって、大卒者の就職難は深刻です。大都市での就職先が限られることから、大卒者が地方へ大きく散り始めています。中小企業や様々なサービス産業へも大卒者が流れていきます。

公務員試験に学生が殺到し激烈な競争となったり、大学院への進学者が増えたものの、人数が増え過ぎて、修士卒でも就職難となったり、中国の大学を放棄し直接海外留学を目指す高校生中学生の動きも急拡大したり、というような顕著な現象が特色です。

このように、受験と就職の厳しい競争で、様々な問題が生じていますが、同時に青少年たちの努力を強烈に引き出し、様々な分野への若者達の飛躍を後押ししています。中国の活力とダイナミズムの一つの源泉にもなっていると言えます。

中国の一人っ子政策に関連して

中国では一人っ子で我儘な青年が育っており、将来の社会にも否定的な影響を及ぼすとの指摘がよくおこなわれます。

ところが、1999年以降毎年の大学入学者数が100万人から700万人弱まで急増していく過程でも、大学の全寮制は維持されてきました。

4人部屋、6人部屋にいきなり入った一人っ子たちが、あれこれ我儘を突合せたりしながら4年間生活を共にするわけです。そこでは細々とした日常の矛盾やいざこざを、自分たちで解決していかざるを得ません。政府としては学生管理の観点からの制度でしょうが、ここで青年たちは大きな社会教育を受けると言えます。

日本でも旧制高等学校の寮制度の効用が言われます。欧米でも寮制度はありませんが、個室です。全員相部屋というのは、中国に独特な制度で、中国の将来を担う膨大な数の青年エリートたちが、こうして社会教育を受け成長して行くシステムが存在していることは、大変に大きな意義を持つものと感じています。

中国も少子高齢化で経済停滞への

見方

中国も早晚高齢化で経済も停滞局面を迎えるであろうとの指摘がよくなされています。しかし、仔細に見ますと、中国の人口構成と発展はもっと異なった局面

を持っています。日本の人口爆発が団塊の世代の1回だけだったのと異なり、中国では戦後、人口爆発の塊が3回あります。最初が1952年〜58年生まれ、2回目1963年〜74年生まれ、3回目1980年代・90年代生まれです。

このうち2回目の塊が大変大きいことから、中国も間もなく高齢化を迎える、また若年層との統計上の人数対比で、人口増加が経済成長に貢献してきた「人口ボーナス」が失われた、あるいは余剰労働力が枯渇する「ルイスの転換点」を越えた等の指摘がなされています。しかし、各塊の学歴構成を見てみると、顕著な発展の兆候が見えます。

現在の政府・党トップ指導者達が属する1回目の塊では、大学卒は全体の0.5%程度でした。2回目の塊では中卒以上が大きく増えましたが大卒は未だ2〜3%です。この塊は中国の改革開放後の外資導入、加工貿易の発展での質の良い労働力を提供したと言えます。そして現在の大学生たちを挟む3回目の塊では、大学卒が20〜30%となります。大きな知的労働力層を生み出していると言えます。もし中国が経済構造や社会発展システムを大きく転換し、知的労働力が力を発揮出来るようになれば、肉体労働よりも

遥かに高い生産性を持つことになるでしょうから、現在30歳あたりを頭とするこの層が今後の中国の経済社会の発展を牽引して行くことになり、引き続き40〜50年、中国は更に大きく発展を続けていく可能性を持っていると言えます。

人口調査の狭間

ところで、中国では全国人口調査が10年に一度行われます。青年層の人口動向を把握するために、直近の2010年と2000年の人口調査データを見ますと、これがうまくつながらず、大きくずれているのです。

2000年調査で0歳であった層は2010年では9歳になり、20歳は30歳になります。それぞれ年齢毎の人口数を並べて見ました。そうすると、2000年調査で0歳〜9歳であった層が、2010年調査では10歳〜19歳なのですが、その数が大幅に増加しているのです。年によって100万人から250万人程多くなっており、元々の合計1億5900万人が1億7500万人と、1600万人も増えています。

2000年の人口調査の結果、幼年層の著しい人口減少状況からして、中国の

近い将来の少子高齢化が、とりわけ顕著な問題として指摘されてきました。それが、2010年の調査では、その対象とされた数字が10%程増えている訳です。また、14歳以下は0歳まで毎年150万人前後のまま略横ばいで、出生人口の減少が更に強まっている訳でもありません。

他方、教育の方からのデータとして小学校入学者数というのがあり、これを各年齢層に対比してみると、2010年の人口調査データより更に毎年200万人程ずつ多くなっています。入学者数を確保する為に、戸籍のある場所で登録されるほかに、親の出稼ぎについていけば、こちらでも勘定に入れられるという、ダブル計上の結果ではないかと推測しています。

何れにせよ、国家社会の将来を占う人口構成のデータそのものに大きな誤差がある点は、十分注意する必要があると思っています。

中国人学生の海外留学

次に、中国人学生の海外留学についてです。図2にありますように、これも21世紀に入ってから、特にこの数年著しい伸びを示しています。昨年は約40万人が

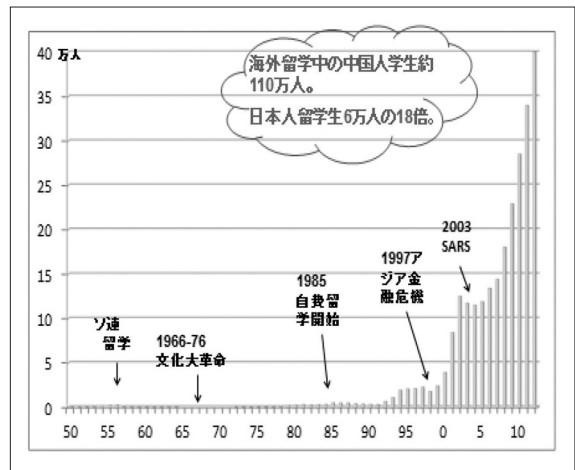


図2 中国人留学生各年出国者数

出国し、海外で勉強中の中国人留学生は110万人となりました。これは日本人留学生約6万人の18倍にもなります。アメリカへの留学生は、10年前は日本・韓国・中国・インド人の数にそれ程大きな開きはなかったのですが、10年後の2012年には日本人は半分以下となり全体の2%。韓国人は倍ほどに増加。トップであったインド人は2010年に中国に抜かれ、抜いた中国人は19・4万人となり、インド人の倍、全留学生の25%を占める程になりました。アメリカに来てはいる大量の中国人留学

生の中には、偽造書類で入学しては見たものの、英語もまともに出来ず、親の金で遊びまわっているような事例も発生しています。トップ層は極めて優秀な学生たちが集まって来ていると言えます。

アメリカで博士号を取得する学生は年間約5万人。これを出身大学別に並べて見ると、清華大学、北京大学が各500人余とアメリカ国内の大学を抑えてトップです。50位内に中国の大学が8校も入っています。

外国人の博士号取得者が1・6万人、そのうち中国が5千人、インド2千人、韓国1・5千人、日本は全部で330人と清華、北京の二校にも及びません。

昨年、中国人作家がノーベル文学賞を受賞しましたが、これ以外にも中国からアメリカやイギリスに渡った人たち、あるいはその子どもでアメリカ生まれ、又は台湾生まれ等、中国系ということで見ると、既にノーベル賞受賞者は10人となります。

日本人受賞者でも発明発見から受賞までは20年30年を経ているケースが多いと思います。現在中国のトップ大学を出て、アメリカの大学で博士号を取得しているこれら膨大な中国人の中から、将来続々とノーベル賞受賞者が現れるような可能

性は十分にあると考えられます。

留学からの帰国者

中国留学生は留学に出たまま帰国しない、そこで中国政府も頭脳流出に対し必死で呼び戻しに努めている、というような話もあったかと思えます。実際の数字を見てみると、留学に出れば、学部なら4年間、大学院は数年間、さらに少し現地社会で経験も積んでみようとなると、出国から帰国までは相当な年数がかかります。出国者が毎年大幅増加してきましたので、出国者に比べて帰国者が著しく少なく見えがちです。

しかし、長期間の統計をしてみると、10年ほどの間を置いて、かなり高い比率で帰国していることが分かります。大体の数字でいうと、これまで留学に出たのが250万人、勉強中が110万人、そのまま残っている人が40余万人、帰国者100万人強となります。

又、留学先に残ったり帰化したような人でも、何らかの形で中国と関係があるとか、行ったり来たりしているとか、又、中国のグローバル化が進めば、留学先に居ついた人がいる方がスムーズに事業展開が出来るということもあります。留学

したまま帰国しないということが実際に問題になることはなくなっていると云えます。

中央政治局集団学習会

勿論留学から帰国した人たちが多数中国でも活躍しています。一例ですが、胡錦濤総書記の時代に、1カ月半に1程度の割合で「中央政治局集団学習会」と言うのが開催されました。中国が直面する様々な課題につき、2名の研究者・学者が招かれて講義をし、中国の党政府のトップが議論をするものです。ここで講義をしたことが学者にとっても高い実績と経歴になるようになっていきます。

胡錦濤総書記の前半5年間の学習会の講師を分析したレポートがあるのですが、41回の講師合計82名のうち、海外留学経験者が43名と半分に達していました。

ただその内日本留学経験者は慶応義塾大学に1年間研究訪問した人が1人だけという状況でした。

中国への外国人留学生

今度は、中国への外国人留学生の話です。

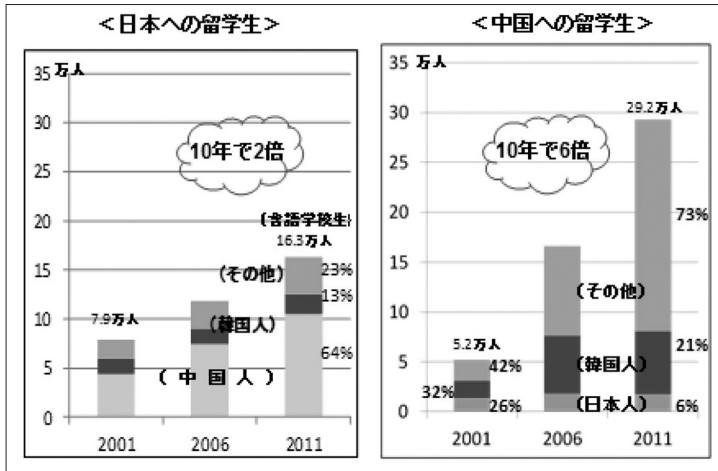


図3 日・中への外国人留学生推移

図3の左図にありますように、日本への留学生は10年間で倍増しました。日本の統計では、3年前から語学学校への学生も留学生として扱うようになり、2011年は合計16・3万人になりましたが、10年前の7・9万人に語学学校の生徒数を加えると10万人程でしたから、厳密に言えば10年間で1・6倍程となります。又、留学生の3分の2は中国人、それか

ら韓国人が2割ほど。その他が2割程度となつていきます。これに対し、中国への外国人留学生は、10年間で6倍に増加し、日本人学生は、もともと1990年代の中国への外国人留学生の3分の1程を占めていましたが、その後、人数はほぼ横ばいで、今や5・6%と少ない存在になっています。韓国人がかなり奮闘して20%程を占めます。しかし現在の特徴は日本、韓国以外の、世界中の国々からの留学生が激増していることです。

アメリカ人の日本と中国への留学生数を対比してみると、日本では10年間でアメリカ人留学生は2倍程に増加し2133人になりました。中国では6倍程に増加し、2万4583人と日本への留学生の12倍になりました。日本へ留学した人は知日家になります。中国へ留学した人は同じように知中国国家になるでしょう。して見ると、アメリカに置いては、今後知日家と知中国国家の差が10倍以上に広がっていくであろう将来が示唆されていると言えます。

同様、フランス人の中国への留学生は8386人と日本への11倍、ドイツ人は6271人と同じく日本への11倍。ヨーロッパでも知日家と知中国国家の差が10倍以上で広がっていくことが示されています。(図4)

中国への外国人留学生は、中国語習得のための短期留学が主でしたが、現在もそれが最多の人数を占めますが、本格的に学位を取得する学部や大学院への留学生も急増しています。10年間でこうした学位を取得するために本格入学する外国

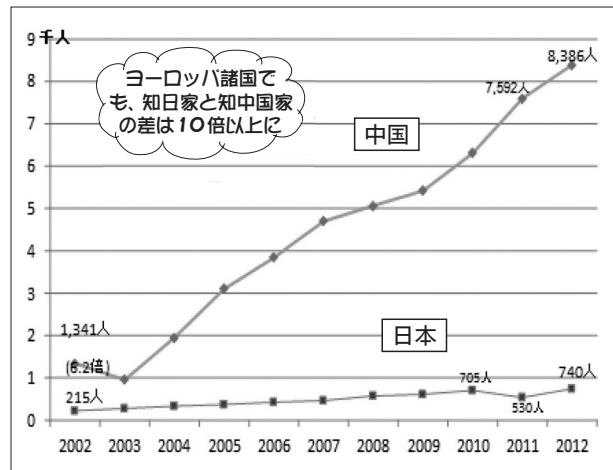


図4 フランス人留学生・日中両国への人数

留学生受け入れ体制

中国への外国人留学生は、中国語習得のための短期留学が主でしたが、現在もそれが最多の人数を占めますが、本格的に学位を取得する学部や大学院への留学生も急増しています。10年間でこうした学位を取得するために本格入学する外国

人留学生の比率は25%から39%へと高まりました。

一番人数が多いのが医学系で、これは中国医学の勉強をする部分もありますが、中国での特別な体制として、英語で医学を勉強し医師資格を取得出来る留学生向けコースが40大学程に設けられ、それを目当てに途上国を中心に毎年5000程の外国人が入学します。

中国への関心の高まりから、中国の文化・経済・法律・政治といった分野も留学生が増えています。トップ大学には大抵英語で受講出来るMBAコースがあります。理工系では、情報産業など、中国が今や機器生産のみならず、ITのユーザー数でも世界一になっているような背景もあり、欧米系の学生が増えたりしています。

それから、われわれの事務所があるビルから目と鼻の先に、2年前、北京大学の留学生宿舍が完成しました。ホテルや家族棟を入れて、ベッド数が3500あります。ここから歩道橋を渡ると北京大学の東門です。東大の外国人留学生3100人中、大学の寮に入れる人数は10数%です。中国のトップ大学では、中国人学生が全寮生であるだけでなく、基本的に外国人留学生に対してもキャンパス内

に留学生宿舍が準備されています。

世界大学ランキング

世界大学ランキングというのは、日本では反感を持たれたり、データや根拠に対して疑義が出されたりすることが多いのですが、国際的には各国の大学も、学生たちも相当高い関心を持っている指標になっています。イギリスのタイムズ・エデュケーションというのが比較的権威が高いとされていますが、上位200位に入るアジアの大学が増えているのが特徴です。逆に日本の大学は数年前には10校ほどあったのが半分になっています。東大はかろうじて20位台を維持していますが、京都大学は北京、清華に抜かれてしまいました。

教育は百年の大計

中国のトップ大学の創立時期を見ると、北京大学が1898年、清華大学が1911年、その他復旦大学、浙江大学、南京大学、上海交通大学なども清朝時代に設立されています。それから百年以上の紆余曲折を経て、今、漸く中国の大学も安定して発展していける状態に辿

り着いたと言えます。国際化も急速に進展出来るような状況になりました。その意味で、教育は百年の大計と言われますが、正にこれから中国で、大学や大学卒業者が中国社会の発展に大きな役割を發揮する時代に入ったと言えるのかも知れません。

女子学生の好きな果物

さて、最後に大学そのものから話題が外れますが、中国での日常生活の中から感じたいくつかの印象的事項をご紹介します。と思います。

中国人女子学生に「好きな果物は？」と尋ねたら、「一番はマンゴスチン。それから桃、イチゴ。サクランボも好きです」との答えが返ってきました。

1990年の中国のリンゴ生産量は1人当たりで日本人の5分の2程でした。それが、1990年代半ばには日本人を上回るようになり、2010年には1人当たりで4倍程にもなりました。中国におけるこの急速で巨大な果物生産の増加は、広く人々が果物を食べられるようになったことを示しています。

今や世界の生産量に占める中国産の比率は、リンゴ45%、桃51%、梨65%、ス

イカは66%となっていています。スイカの生産量は日本の100倍以上で、輸送網とビニールハウスの発展により、北京でも一年中スイカを売っています。平均して中国人は日本人の10倍以上のスイカを食べている訳です。

1980年に6万トしか生産していなかったバナナは30年間で170倍に増えて1040万トと、日本の輸入量100万トの10倍になりました。今や、中国の子どもたちもバナナを見ても特に嬉しそうな顔はしなくなりました。

淡水魚を食べる中国料理

肉類の1人当たり消費も2000年には日本を上回りました。卵も2007年に上回りました。

魚は、1980年ごろの中国の漁獲高は日本の消費量の半分程で、1人当たりしてみれば日本人の5%程度でした。それが30年間で10倍に増え、今や日本人の半分程の量になりました。

特に増加の大きかったのが淡水養殖魚で、数十万トであったのが2200万トと、日本の全漁獲高の4倍程になりました。レストラン等で、人々が今日は少し贅沢をしようかとなると魚料理を注文し

ます。北京などでは大きめの淡水魚を焼いて臭みを取り、トウガラシ・ニンニク・野菜で煮付けた料理が人気です。

農民も田んぼを池に変えて魚を養殖した方が儲かるので、こうした淡水養殖場は中国全土で拡大しました。今や合計面積が6万km²と日本の全耕地面積5万km²弱を上回る程です。

同じ量の蛋白質を作るのに必要な穀物の量は、多い方から牛↓豚↓鶏↓魚とされます。中国の肉の消費量が8000万トですから、淡水養殖魚は大きな貢献をしていると言えます。

昼食に食べるぶっかけご飯

私も昼食は大体事務所の近くの食堂で野菜炒めぶっかけご飯を食べます。道端の露店の売り子や、工事現場で働いている農民工も、肉野菜炒めたっぷりのぶっかけご飯弁当を食べています。中国の野菜の消費量は普通ではありません。

世界の生産に占める中国産の野菜のシェアを見てみると、キャベツ47%、ニンジン45%、トマト30%、キュウリは73%となっています。キュウリを生や漬物以外に、色々な炒め物にしたり、スープにしたりする民族はあまりなさそうです。

確かに中国には貧困に喘ぐ人々、格差に苦しむ人々が沢山います。ただ、極貧の人が1億人とすると、正に無数の貧困物語があると同時に、12億5千万人はその極貧状態ではないことになりました。食べることに關して言えば、殆どの中国人が、普通の日本人よりは豊かな食事を出来るようになっていると言えそうです。

且つ、それはごく最近の大きな発展によるもので、冒頭に大学入学者数の推移の所で提示したように、中国社会では21世紀に入る前後で大きな転換飛躍が起こりましたから、過去の中国を見る目ではなかなか現在の実態が理解しにくくなっているのではと感ずるものです。

(6月25日・アジア研究懇話会)

講師紹介(みやうち ゆうじ)

- 1947年 神奈川県生まれ
- 1971年 東京大学教養学部卒業
- 1973年 三菱商事入社
- 1978〜81年 北京駐在
- 2004年 三菱商事(上海) 総経理
- 2007年 室長
- 2007年 退社
- 2007年 東京大学北京代表所々長